



医療者が行うべき行動に焦点を当てた実践書

評者 前野哲博 筑波大学附属病院総合診療科

人は誰でも死から逃れることはできず、医療者は“いのちの終わり”に向き合う機会が多い。ところが、医療者になるためのトレーニングでは、病気をとりのぞいて回復をめざす治療法については詳しく学ぶものの、「エンドオブライフ・ケア」について体系的なトレーニングを受ける機会はきわめて乏しい。そのため、往々にして医療者は、患者がいのちの終わりに向かう事実をタブー視したり、自らの業務範囲外と見なしたりしがちである。そのうえ、エンドオブライフ・ケアに正面から向き合おうにも、医療者の個人的な経験や見識に任されている部分が大いなので、具体的にいつから、どのように対応すべきなのかとまどうことも多い。

本書『いのちの終わりにどうかかわるか』は、まさにこのテーマに正面から取り組んだ本である。本書は、いのちの終わりが近づいた時の時系列に沿って構成されており、冒頭の総論に引き続いて、評価、予後予測、治療とケアのゴールの話し合いについて取り上げられている。臨死期の対応については、「1週間」「48時間」「臨終時」のそれぞれのフェーズに合わせて詳しく述べられており、さらに患者が亡くなったあとの喪失と悲嘆への対応と続き、最終章では、アドバンス・ケア・プランニングとベスト・インタレスト論がまとめられている。このように、エンドオブライフ・ケアのすべてのフェーズが網羅されているので、本書1冊で包括的にエンドオブライフ・ケアについて学ぶことができる構成となっている。

プライマリ・ケアに通じるエンドオブライフ・ケア

各章では、典型的なケースが取り上げられ、簡潔でわかりやすい解説に続いて、ケースへの具体的な対応、そしてクリニカル・パールの順にまとめられている。本書の特徴は、すべての章が、実際に医療者が行うべき「行動」に焦点を当てた実践書というコンセプトで貫かれていることである。さらに詳しく勉強したい読者に対しては、簡単な解説のついた参考文献リストがついているので、さらに掘り下げて学びを深めるガイドにもなっている。

エンドオブライフ・ケアは、がん患者の緩和医療だけを対象とするのではなく、病気の終末期になってから考え始めるものではない。医学的な症状にのみ対応すればよいわけではなく、ケアの対象は患者だけでもない。身近なところで、包括的に、継続的に、チームで協調しながら、1人ひとりの状況や価値観を尊重しながら行うべきものであり、本書を読んで、これはまさにプライマリ・ケアの特徴として位置づけられる「ACCCC (access, comprehensiveness, continuity, coordination, contextual care)」に通じる概念であることを改めて実感した。

未曾有の多死時代を迎える今、医療者としてのたしかなスキルをもって、“いのちの終わり”に正面から向き合い、最善のエンドオブライフ・ケアを提供するために、プライマリ・ケアに関わるすべての医療者に、ぜひ一読をお勧めしたい。



《ジェネラリスト BOOKS》 いのちの終わりに どうかかわるか

木澤義之、山本 亮、浜野 淳＝編

定価：本体 4,000 円＋税
A5・304 頁／医学書院／2017
[ISBN978-4-260-03255-1]